

ロングフェロー著『エヴァンジェリン』再考
マイエ著『エヴァンジェリーヌ二世』とのインターテキスト性を
てがかりに

荒 木 陽 子

Abstract

Evangeline (1847), an American narrative poem by Henry Wadsworth Longfellow, played a crucial role in the construction of cultural identity of Acadians, a group of French-speaking Canadians mostly found in maritime provinces. The world famous poet's representation of the Great Upheaval of 1755 enabled Acadian nationalists to differentiate themselves from other French population in North America, notably Quebeckers, and proclaimed their existence to the world in the wake of Acadian Renaissance in the late nineteenth century. Acadian cultural elites of the Second Acadian Renaissance in the 1960-70s, however, protested the images of Acadians created by the Harvard professor and favored by their Acadian predecessors. One of the protests was from Antonine Maillet, an Acadian winner of the Prix Goncourt, who explicitly overturned the images of *Evangeline* in her play *Évangéline Deusse* (1975), a form of parody of *Evangeline*. Presenting a subversive anti-*Evangeline* character who bears the same name, Maillet attempted to present a new Acadian heroine in the era after their significant socio-cultural victory in 1960s: the Equal Opportunity Programme and Official Languages Act of 1969 in New Brunswick, Canada. Comparing the two *Evangelines*, this article will reexamine the problematic images of Longfellow's *Evangeline* still enshrined in Acadian institutions in spite of criticisms.

キーワード.....ロングフェロー エヴァンジェリン マイエ アカディア
ニュー・ブランズウィック

はじめに

近年、アメリカの詩人、ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー(Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882)の名を再び耳にするようになった。その背景には、アメリカ合衆国においてヨーロッパの文化・文学に精通し、その影響を詩作と大学における外国語教育を通して 19 世紀のアメリカ

かに伝えたロングフェローが、アメリカにおけるマルチカルチュラリズムのパイオニアとして再評価されはじめたことがある。1994年、ロングフェローがかつて外国語を教授したハーヴァード大学は、アメリカにおける英語以外の言語・文学をマルチカルチュラリズムの文脈で研究することを目的とするロングフェロー研究所(Longfellow Institute)を創設し、ジョーンズ・ホプキンス大学出版局と共同でロングフェロー研究所アメリカ言語・文学シリーズ(Longfellow Institute Series in American Languages and Literatures, 1996-)を刊行した。それに続き旧ロングフェロー邸、クレイギー・ハウス(Craigie House)は、連邦機関により修復され、2002年に再オープンを果たした¹⁾。これらはパブリック・スペースにおけるロングフェロー再評価の表出と考えられよう。加えて、同時期にダナ・ジョイア(Dana Gioia)が『ザ・コロンビア・ヒストリー・オブ・アメリカン・ポエトリー』(*The Columbia History of American Poetry*, 1993)において、ロングフェローのモダニズム時代以降の評価の急落について一つの章を割いて論じ、詩人がアメリカに与えた文化的影響を再考したことは、この動きの大きな後押しになったに違いない。

しかし、ロングフェロー作品は母国の文学史上で軽視されている間にも²⁾、隣国カナダの異なる文脈において人々の関心を保ちつづけた。それは主として詩人が、1755年の「アカディア人の追放」(*Great Upheaval/Le Grand Dérangement*)の犠牲となったカップルをテーマとして取り上げた物語詩『エヴァンジェリン アカディアの物語』(*Evangeline: A Tale of Acadie*, 1847)を書いたためである³⁾。

ニュー・ブランズウィック州出身のアカディア人であるアントニーヌ・マイエ(Antoine Mailliet, 1929-)は、戯曲『エヴァンジェリーヌ二世』(*Évangéline Deusse*, 1975)において、パロディのもつ批評機能を利用し、ロングフェローの『エヴァンジェリン』の批評を試みているのではないだろうか。本稿はこの問いをもとに、アメリカの詩人ロングフェローが、『エヴァンジェリン』のなかで作りに出したアカディアとアカディア人のイメージを、そのパロディ作品『エヴァンジェリーヌ二世』を参考に用いながら再考する。二つの作品に描かれた異なるエヴァンジェリンのイメージを、それぞれのイメージが作りだされたコンテキストにおいて検討し、ロングフェローの『エヴァンジェリン』を今日の視点から読みなおしたい。

1. アカディアとロングフェローの『エヴァンジェリン』

(1) 『エヴァンジェリン』の歴史的背景

本章では、数多あるアメリカ詩のひとつに過ぎない『エヴァンジェリン』がカナダにおいて特殊化されてきた背景を簡単に確認したい。1604年、フランス人ピエール・デュ・グワ・ド・モン(Pierre du Gua de Monts, 1568-1630頃)の率いるフランス語系の入植者は、イギリス系に先駆けて、現在のアメリカ合衆国メイン州のサント・クロワ島(Saint Croix Island/Île de Sainte-Croix)に上陸する。彼らは、のちにその中心をノヴァ・スコシア州のポール・ロワイヤル(Port Royal, 現

在の Annapolis Royal)へと移し、カナダ沿海州を中心に植民活動を行う⁴⁾。彼らはカナダ沿海州のみならず、ニュー・イングランド、ケベック州の一部にも及ぶフランス領アカディア(Acadia/l'Acadie)を築いた。しかし、やがてイギリスの植民活動が活発化すると、この地域の所有権は何度も英仏の間を往来した後、1713年ユトレヒト条約を最後に完全に英領化される。英仏のどちらにも武器をとらない「中立のフランス人」(neutral French)として、カソリック信仰を保ちながら英領で生活し続けたフランス語系住民アカディア人(Acadians/Acadiens)は、フランスや同盟関係にあるミクマック族(Mi'kmaq)に武器を取るようになるイギリス国王への完全な忠誠を誓うことを拒否した。その結果として、彼らは1755年から七年戦争が終了する1763年まで故郷を追われ、多くはフランスやイギリス、当時イギリス領であった合衆国東海岸、またはルイジアナへと離散した。これが「アカディア人の追放」である。七年戦争終結後、アカディア人はカナダ沿海州へと帰還することを許されたが、かつて彼らが開墾したアナポリス・ヴァレーへの再定住は許されなかったため、多くは現在のニュー・ブランズウィック州(New Brunswick/Nouveau-Brunswick)の海岸部に再定住した。また、カトリック教徒に寛容な旧フランス/スペイン領ルイジアナ⁵⁾に定住したアカディア人は、ケイジャン(Cajun)として知られる。

様々な先行研究により、ロングフェローがナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)とその知人の牧師コノリー(Horace L. Conolly)などを経て『エヴァンジェリン』の原型となるアカディア人カップルの離散の物語を伝え聞いたこと、そしてこのカップルの物語を含む「追放」に関する記述を収録したノヴァ・スコシア出身の歴史家ハリバートン(Thomas Chandler Haliburton, 1796-1865)の著作を研究し『エヴァンジェリン』を書き上げたことが明らかにされている⁶⁾。しかし、ロングフェローは『エヴァンジェリン』を書くことによって、アカディアの歴史を再現しようとしたのではない。彼の主眼はむしろ、拳式を目前に「追放」により離れ離れになりながら、婚約者との再会を信じ続けたあるアカディア人女性の「我慢強く」「貞淑」かつ「従順」「敬虔」なあり方に感銘を受け、彼女個人をモデルにした詩を書くことであり、そのために「エヴァンジェリン」と「ガブリエル」(Gabriel)という架空のキャラクターを作り上げたのである⁷⁾。

(2)物語詩『エヴァンジェリン』からアカディアの神話『エヴァンジェリーヌ』へ

しかし、19世紀後半この「あるアカディア女性の物語」は、「アカディアの物語」として読み替えられることになる。1865年『エヴァンジェリン』は、ケベック人パンフィル・ル・メ(Pamphile Le May, 1837-1918)によってフランス語訳され出版される。同時期に離散先からカナダ沿海州に帰還して一世紀を迎えようとしていたアカディア人の中で、自らのアイデンティティを、英語系住民そしてケベック人から差別化しようとするアカディア人・ナショナリズムがおこる。それまで幾多の独立した小さなコミュニティでそれぞれ生活していたアカディア人は、学校教育の整備、そして地元で出版されたアカディア人のための新聞によって結ばれ、急

速に集団意識を強めてゆく。

だが、それまで英語系勢力によるフランス語弾圧のためフランス語で記録を残すことを禁じられていた上に一般的に識字率が低かったため、口頭伝承を頼りに自らの経験を伝えてきたアカディア人は、その成員が共有し、自らを明確に英語系住民やケベック人から差別化するために提示できる文書を持たなかった。特に、ケベック人との明確な文化的違いを提示できないにもかかわらず、ケベックからの分離独立の志向が強いアカディアン・ナショナリストが、ケベック人から批判されたことはいうまでもない⁸⁾。ここでアカディア人文化リーダーが、アカディア人の共有できる既存の物語として注目したのが、ル・メが仏語訳したロングフェローの『エヴァンジェリーヌ』であった⁹⁾。『エヴァンジェリーヌ』は、1860年代には既にメムランクック(Memramcook)に創立されて間もないアカディア人向けカレッジ、コレージュ・サン・ジョセフ(Collège St-Joseph)で教授されていた¹⁰⁾。また、『エヴァンジェリン』の仏語訳は、1867年に創刊された『ル・モニトゥール・アカディアン』(*Le Moniteur acadien*)誌上に掲載された。こうしてエヴァンジェリンの物語は急速にアカディア人の間に広がる。そして、1881年から1890年までに沿海州各地において3回にわたって執り行われた「民族会議」(National Conventions)を背景に、1887年に新しく生まれたアカディア人向け新聞は『エヴァンジェリーヌ』(*l'Évangéline*)と名づけられるに至る。このように、第一次アカディアン・ルネッサンスとよばれるアカディア人の民族意識形成期に、アカディア人の文化リーダーは『エヴァンジェリン』というフィクションを利用して、アカディア人の民族意識を鼓舞していったことが分かる。ロングフェローは詩の最後に、アカディア人の家庭でエヴァンジェリンの話が繰り返し語られているという設定を行っているが¹¹⁾、英語で詩を書いたアメリカの詩人は彼の作品が実際にそうなることを想像していたとは考えにくい。

2. 『エヴァンジェリン』が描くアカディア像

(1) グラン・ブレという土地の描き方: 遠い昔のパラダイス・ロスト

では、ここからは『エヴァンジェリン』で描かれるアカディア人像を検証してゆきたい。『エヴァンジェリン』は、二部構成からなる強弱弱調六歩格(dactylic hexameter)の脚韻を持たない物語詩である。一般的に『エヴァンジェリン』は英雄叙事詩=エピック(epic)と考えられてきたが、「エヴァンジェリン」という女性主人公を中心とする恋物語であること、また作品がエピックと呼ぶには短いことなどから、フランクとマースはこれがエピリオン(epyllion)形式であると主張する(Frank and Maas 2005: 34)。

叙事詩は、冒頭で物語の設定を紹介することが多いが、『エヴァンジェリン』も多分にもれなない。英語詩にはまれであるが古典的叙事詩によくみられる韻律の使用に加え、詩の最初と最後に繰り返されるフレーズ「太古の森」[“This is the forest of primeval” (l. 1, l. 6), “Still stands the

forest primeval” (l. 1381, l. 1390)]による物語のフレーミングは、比較的新しい過去に同じ大陸でおこった「追放」からイギリス系住民のアナポリス・ヴァレー定住、そして離散先から戻ったアカディア人の再定住まで「事件」を遠い過去のものとして描くことを可能とする。これは、ロングフェローの主たる読者である北米の英語系の読者層に対して、議論の対象となりえる詩の主題を非政治化する試みなのではないだろうか。

ロングフェローはグラン・ブレを原始的かつ、美しく、肥沃で平和な農村[“pleasant farms” (l. 12), “simple Acadian farmers” (l. 52), “home of the happy” (l. 19)]として描き、それが天国のイメージを反映していることを示唆している[“reflecting an image of heaven?” (l. 11)]。このようなアカディアが「追放」によって「永遠に失われた」[“forever departed!” (l. 12)]ことを冒頭で嘆くことによって、詩人はあらかじめ読者に古代ギリシャのアルカディアや聖書の失樂園との連想を喚起する¹²⁾。そして、この田園、特に家畜を伴う牧草地のイメージがアカディアと強く結びついていることは、亜熱帯性のスワンプを思わせるルイジアナ一般の描写が、その中にあるアカディア人ディアスポラにいたると急に田園化することからも察することができる (ll. 888-1077)。

さらに筆者は詩人がこの対比の列に「都市」を加える点に注目したい。カーターとマクレーが指摘するとおり、ロマンティズム時代の詩人は一般的に産業化した都市に対比して田園を理想化した(Carter and McRae 1996: 103)。ロングフェローが、詩の最後にエヴァンジェリンとガブリエルが埋葬されているペンシルヴァニアの墓地の位置を「街の中心」[“In the heart of the city” (l. 1384)]として、距離的に遠い故郷の「村」[“village” (l. 9)]との精神的・時間的な距離をも強調したことはその時代性を感じさせる。

(2)ロングフェローのエヴァンジェリンの描き方

前述のとおり『エヴァンジェリン』が、ある女性の献身の美しさと強さ、そして苦難に耐え続ける愛情をテーマにしていることは、詩の冒頭で明確に述べられている。しかし、詩の第一部で、十七歳の優しい処女エヴァンジェリンは村で最も豊かな農夫ベネディクト・ベルフォンティン(Benedict Bellefontaine)の娘であり、さらに村の誇り(“the pride of village”)でもあったと記載されていることから、ロングフェローの思いにはあらずとも、エヴァンジェリンという存在が既に「個人」を超えてアカディア人の共有財産化されてゆくことは避けられない(l. 61)。しばしば大衆化されたイメージの中で見られるように、娘は茶色の髪と黒い目を持つ。彼女の美しさとともに、清らかな性格を伝える“fair”という語は、第 65 行目をはじめとして詩の中で繰り返し言及される。

エヴァンジェリンは単に美しい女性として性格づけされているわけではない。エヴァンジェリンは農夫の家の家事をひとりで仕切り、婚礼の持参品のリネン類も自らこしらえたことから (l. 104, l. 366)、実務的に有能な女性であることが暗示される。しかし、この性格づけはロング

フェローによって「主婦のための技術」"her skill as a housewife"と一括され、エヴァンジェリン個人の才能として発展させられない(l. 368)。ここからロングフェローの保守的な女性観がうかがわれる。

エヴァンジェリンは詩の第一部で、村の鍛冶屋バジル・ラジュネス(Basil Lajeunesse)の息子ガブリエルと婚約するが、村を挙げての婚約祝いの祝宴はイギリス軍の来襲により中断される。この時、教会に徴収された村の男たちの帰りを「忍び待つ」エヴァンジェリンの行為が、それまで優しく、若く、美しく、器用な娘に過ぎなかった彼女に、新たに「神々しさ」あたえる点は興味深い。エヴァンジェリンの変化を映し出す部分をここに引用する。

Thus did Evangeline wait at her father's door, as the sunset
Threw the long shadows of the trees o'er the broad ambrosial meadows.
Ah! On her spirit within a deeper shadow had fallen,
And from the fields of her soul a fragrance celestial ascended,
Charity, meekness, love, and hope, and forgiveness, and patience! (ll. 497-501)

上の引用からロングフェローが、悲しみと引き換えにエヴァンジェリンが得る慈悲、温和さ、愛、希望、寛大さなどの性格の中で、特に強調記号とともに列挙の最後におかれた「耐え忍ぶ」性格(patience)を強調しようとしていることが分かる。そして、エヴァンジェリンがガブリエルとの再開を待つ5日間に、それまでさほど強調されていなかった彼女の「信仰心」が繰り返し再確認される(ll.482-523)。エヴァンジェリンは話の中で常に男性に導かれるが、この信仰心の高まりの中でそれまで彼女を保護してきた父を亡くし、ガブリエルとも生き別れになったエヴァンジェリンの旅を村のフェリシアン神父(Father Felician)、荒野の伝道団の神父(l. 1203)、そして最終的には神が導くことは自然になる。『エヴァンジェリン』に描かれる神父の統率力と、それに従う従順な農民の姿は、その詩のもつ田園詩(idyll)的性格と重なる。

さらに、第二部に入ると、まだそれほど年老いていないであろうエヴァンジェリンが、ガブリエルを探す旅の中で次第に情熱を失う一方で信仰心を強めてゆく。例えば、エヴァンジェリンはルイジアナで行き違いになったガブリエルをバジルと追う途中で伝道団に出会うと、その神父がガブリエルは秋に狩が終われば戻るというのを信じ、追跡をやめ伝道団と結果的に越冬する。ここで詩人は、エヴァンジェリンの声に「従順な」("submissive")という形容詞を与える(l. 1202)。詩の中で従順さを示す"meek", "meekly"も多用されることから、信仰心の高まりと同様に、ロングフェローがエヴァンジェリンの忍耐力と同時に「従順さ」を重視している点も注目されるべきであろう。

エヴァンジェリンに大きな変化がもたらされるのは、彼女が戻らぬガブリエルをミシガンへと追うときである。それまで、常に父、神父、義理の父などの男性保護者とともに旅を続けて

きたエヴァンジェリンが一人で旅を始めるのである。この部分はエヴァンジェリンがついに神との交流に仲介者を必要としなくなったこと、または、彼女がついに世俗の保護者から独立したことの表現と考えることができるであろう。やがて長く危険な旅の後(l. 1245)、エヴァンジェリンはペンシルヴァニアで慈悲の聖母修道女会(the Sisters of Mercy)の一員として奉仕活動をはじめ。このとき「死んだものとして」若いままのガブリエルのイメージを心にとどめ (“Gabriel was not forgotten. Within her heart was his image, / Clothed in the beauty of love and youth, as last she beheld / him.”)、彼を追うことをやめるのである(II. 1276-77)。

この一連のエヴァンジェリンの変化を考慮すると、『エヴァンジェリン』は、世俗を捨てた神への絶対的寄与という精神的成長をめざす旅物語形式のビルドゥングスロマンと捉えることもできる¹³⁾。この変化をエヴァンジェリンの世俗の男性権力からの自立の完成と読む可能性は、ロングフェローが、エヴァンジェリンがさらに強い父権的性格を持つ神の道に進んだことを書きとめることにより困難になる。ロングフェローは詩の終末の間近でこの離散の旅の経験が「忍耐」「自己犠牲」「奉仕」という性質を培い、ついに従順なエヴァンジェリンが神の道を歩むことを選ぶと(l. 1287)、以下のように頭に御光がさしている描写を与えエヴァンジェリンを聖人と同列にならべる。

Gleams of celestial light encircle her forehead with splendor,
Such as the artist paints o'er the brows of saints and apostles,
Or such as hangs by night a city seen at a distance.
Unto their eyes it seemed the lamps of the city celestial,
Into whose shining gates erelong their spirits would enter. (II. 1315-19)

第二部後半において詩人はエヴァンジェリンに対して、天界を示す言葉(“celestial,” “heaven”など)を頻用する。ここからも、詩人がエヴァンジェリンを世俗から引き離そうとしていることが察せられる。エヴァンジェリンは、バニヤン(John Bunyan)の『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678)の主人公が苦難を経て天の都に至るかのよう、ある種修行を終え世俗の欲と乖離したとき、死の床にある、年老いて白髪のカブリエルと出会うことが始めて可能になるのである(II. 1343-80)。しかし、詩は最後まで聖人物語としては完成しない。大きな問題は、二人が目の前にある長い年月を経た現在の二人を受け入れるのではなく、互いの「若き姿」に思いをはせることであろう。ロングフェローの用いる若さを連想させるガブリエルの姓ラジュネスや、エヴァンジェリンに年老いた後もついて回る「乙女」「maiden」という言葉からも察することができる。「若さの理想化」は、詩の最後に聖人に仕立て上げられようとしていたエヴァンジェリンを世俗的かつセンチメンタルなメロドラマ的世界に引き戻す。詩人の若さの信仰がフェミニストの立場から問題視されるのは当然であるが、それはエヴァンジェリンをある種の聖人物語と

して完成させようとするロングフェロー自身のそれまでの物語作りとも反目する点でよりおおきな問題である。

(3)従順なエヴァンジェリン像に対する支持と批判

このように従順、敬虔かつ耐える聖人的な女性としてのエヴァンジェリンがアカディア人文化リーダーに支持されてナショナリストの言説に取り組みだてられた背景については、これまでも様々な研究者が論じてきた。その中で特に重要な点はグリフィスが1982年の論文に指摘するとおり、エヴァンジェリンをアカディア人ナショナリストの言説に取り込んだ第一次アカディアン・ルネッサンスを牽引した文化エリートにカトリックの聖職者が多く含まれていた点である。初めてのアカディア人向けのカレッジがカトリック教会により運営されていたことからこれは妥当な注目である。特に、神父に従順に従うエヴァンジェリンは、アカディア人神父にとって理想的な教区民像であったのではないだろうか。また、圧倒的に多い英語系住民と共存してゆくにあたり、従順なエヴァンジェリンを民族の象徴として提示することは適切な選択でもあったであろう。マイヤーは1994年の論文で、この従順なエヴァンジェリン像が、ともすれば合衆国民の仕事を奪う敵としてとらえられる、産業革命後のニュー・イングランドで急増した繊維産業に従事するフランス語系カナダ人移民の良きイメージ作りに貢献したであろうことを示唆している。

しかし、1960年代にはじまる第二次アカディアン・ルネッサンスにおいて、従順で受身なエヴァンジェリンを民族のヒロインとする動きは批判を受け、とくに若者層から新しいアカディアのヒロインを捜し求める動きがおこる¹⁴⁾。初めてアカディア人コミュニティから輩出されたニュー・ブランズウィック州知事ルイ・ロビシヨ(Louis Robichaud, 1925-2005)は、1960年から70年に渡る任期において、医療・福祉・教育の平等を目指す機会均等プログラム(Equal Opportunity Programme)、沿海州で初めてのフランス語系総合大学モンクトン大学(Université de Moncton)、公用語法(Official Languages Act)をアカディア人社会にもたらす。そしてモンクトン大学では「共同生き地獄」(collective living death/mort-vivant collectif)として表現された当時のアカディア社会・文化に不満を感じる学生たちの間で学生運動が起こる¹⁵⁾。こうした学生活動家の中からレイモン・ルブラン(Raymond LeBlanc)ら多くの詩人があらわれたが、これらの詩人たちは先に小説家・劇作家として成功していたアントニーヌ・マイエとともに、アカディア文学の大きな流れをつくりだす。このような積極的なアカディア人たちに、100年以上前にアメリカ人が作ったアカディア人ヒロインのイメージがあわなくなるのは、当然のことであろう。

3. 『エヴァンジェリーヌ二世』の描くアカディア像

(1) アカディアの設定

1975年、こうしたアカディア人コミュニティの活性化のなか、兼ねてから自身の作品の中で、『エヴァンジェリン』に言及し、エヴァンジェリーヌという名のキャラクターを用いたり、またエヴァンジェリンを否定するような女性像を提示してきたアントニーヌ・マイエが、「反エヴァンジェリン」的キャラクターを中心に配する戯曲『エヴァンジェリーヌ二世』を出版する¹⁶⁾。

タイトルが示すとおり、このテキストはロングフェローの『エヴァンジェリン』の「文脈横断」を経たパロディになっている¹⁷⁾。模倣や遊びであるとして軽蔑されがちなパロディという形式が、教育機能、批評機能を持つことは、ハッチオン(Linda Hutcheon)が『パロディの理論』(A Theory of Parody)において指摘している(ハッチオン 1993: 16)。ここでは、マイエが『エヴァンジェリン』を用いておこなった批評行為を検証したい。まず、第一に作品形式は、いずれも二部構成からなる恋物語であり、最後に恋人(男性)が死ぬという共通点をもつが、ロングフェローの『エヴァンジェリン』と同じく、『エヴァンジェリーヌ二世』は学者詩人ロングフェローが作った格調高く人工的な韻律を持つ英語の物語詩から、シアック(Chiac)とよばれるニュー・ブランズウィック州東部で話されるアカディアン・フレンチの一種を用いた戯曲に変わっている。これは自らが文学者・民俗学者としてアカディアのフォークロアを研究し、アカディア文化における口頭伝承の重要性を認識するマイエにとって、より自然なアカディア人の語りを表現するための格好の手段として考えられよう¹⁸⁾。

また、『エヴァンジェリーヌ二世』は『エヴァンジェリン』の「追放」というテーマを、現代社会ありふれた出来事 基幹産業であった漁業の不振 によって再び故郷を離れなければならなくなった現代のアカディア人の状況に書き換える。特にエヴァンジェリーヌが、自分の力で大都市へと仕事を求め移動しなければならない現代のアカディア人の視点から、イギリス人が船で目的地へと送ってくれた「追放」の被害者をうらやむ様は皮肉である。エヴァンジェリーヌは、劇中の登場人物たちである、ブルトン(Le Breton)、ラビ(Le Rabbi)、そして交通誘導員ストップ(Le Stop)に次のように語る。

Ben voulez-vous saouère, Messieurs? C'est justement à l'heure que j'avons achevé de replanter que j'avons fini de payer nos églises et nos écoles, pis achevé de jeter nos trappes à l'eau, qu'ils s'en venont nous dire que la me rest vide et la terre pourrie, et que je serions aussi ben de mouver à la ville dans les *shops* gouvarnées encore un coup par les Anglais. . . .Encore un coup, ils nous déportont; ben c'te fois-citte, sans meme nous fournir les goelettes. . . .pis ils avont point fait de nous autres des héros pis des martyrs. (p. 48)

以上、シアックを紹介するため原典を引用したが、この発言は現代のアカディアの過去からの距離を知るために重要であるので、拙訳で紹介させていただきたい。

「ちょっとこれを聞いてよ、だんながた。わたしがやっと故郷に戻って、教会と学校に金をかけて、水の中に罾をかけ終わったところだっていうのに、今度は奴らは、海は空っぽだし、畑は腐ってるから、町に引っ越して英語系の人間がやってる工場で働いたほうがずっと金になるっていうんだ……。奴ら、もう一度私らを追放しようっていうんだ。けれど今回は帆掛け舟も出してくれない。……。奴らは私らを英雄にも殉職者にもしてくれなかった。」¹⁹⁾

したがって、物語は典型的な牧歌的アカディア空間(カナダ東海岸)ではなく、息子夫婦とともに過ごすためにニュー・ブランズウィック州東部の架空の村ル・フォン・ドウ・ラ・ベ(Le Fond de la Baie)からエヴァンジェリーヌが移住した現代モントリオールを中心に展開される。物語の中心を、アカディア人以外の故郷を追われたものを多く抱えるメトロポリスに設定することは、マイエのアカディア人を他の流浪の民から特殊化しようとするナショナリストの言説に対する抗議の姿勢を感じさせる²⁰⁾。『エヴァンジェリーヌ二世』において、アカディアという空間は偏在する「失われた故郷」へと非特殊化される傾向にある。『エヴァンジェリーヌ二世』の登場人物は、エヴァンジェリーヌを除いてアカディア人ではないが、やむを得ない理由でモントリオールにやってきたエクザイルとしての経験を共有する。

(2)マイエのエヴァンジェリーヌの描き方

マイエは物語の設定を変更するのみならず、エヴァンジェリーヌのキャラクター作りにおいても、オリジナルのエヴァンジェリンに挑戦する。ロングフェローの描くエヴァンジェリンが永遠の処女であり、一人も子供を持たないのに対し、エヴァンジェリーヌは11人の息子の母であり、80歳の老女である。戯曲の中で「老い」に付きまとうネガティブな表現はみられず、それはむしろ「成熟」として表現されている。エヴァンジェリーヌ自身の成熟はあたかも「追放」の時代から200年以上を経たアカディア自体の成熟をおもわせる。しかし、ロングフェローに見られる処女性、若さの賛美は『エヴァンジェリーヌ二世』では行われな一方、エヴァンジェリーヌが精神的に老いることを自ら拒否している点は興味深い。

エヴァンジェリーヌは、エヴァンジェリン同様、若いときに海に消えた恋人シプリヤン(Cyprien)を持つ。しかし、ガブリエルを探し続け生涯を終えるエヴァンジェリンに対して、エヴァンジェリーヌは彼を愛し続けながらも、生きてゆくための現実として酒の密輸業者であったシプリヤンではなく、父の隣に土地を持つノレ(Noré)との結婚を選択する。ここでマイエが『エヴァンジェリン』では貧富の差の少ない農耕社会として描かれていたアカディアのコミュ

ニティの表象に、階級概念を取り込んだことは意義深い。そして劇中、既に夫と死別した彼女は登場人物の一人である同じ年のブルトン人男性と短い恋愛関係をもつ。

マイエは、エヴァンジェリーヌを単に豊穡かつ能動的、現実的で賢い女性として描くことよってのみパロディを展開するのではない。作者は、作品の中でエヴァンジェリーヌに積極的に『エヴァンジェリン』に言及させる機会を与える。作者は、エヴァンジェリーヌにロングフェローが称賛するエヴァンジェリンが自らの名前の由縁であり、彼女が故郷で「守護聖人」「聖母マリア」のように扱われていることを認めさせ(p. 42)、その上で、「アメリカ人だって！そんなもん信じられるか！工場で何でもかんでも親方づらするだけでは飽き足らずに、今度はわたしに守護聖人をくれるってか！²¹⁾」(p. 43)と自分自身をアメリカ人の作り出したエヴァンジェリンから引き離し、彼女の処女性を不毛さ、若さを経験不足、従順さを無能として直接批判させる。マイエのとった表現手法は、エヴァンジェリーヌ同様に強く攻撃的である。

4.おわりに：『エヴァンジェリン』を再考する

ここまでの議論で、20世紀後半に創出された『エヴァンジェリーヌ二世』が、前世紀半ばに書かれた『エヴァンジェリン』を現在のコンテクスト上に再構築し、現代を生きるアカディア人の視点からアメリカ人の描いた「エヴァンジェリン」と「エヴァンジェリーヌ」の距離を前景化し、ロングフェローの描くエヴァンジェリン像の問題点をパロディという手法によって批判したことを指摘した。特に最大のアカディア人口を抱えるニュー・ブランズウィック州において、北米規模の公民権運動の時代を経てアカディア人が社会的地位を高めつつあった時期に、アカディア人自身が、自己イメージを肯定的・能動的に書き換えたことの意義は大きい。また、その主人公の最後まで権威(恋人、父、聖職者、神)に従順な若い女性から、非常に能動的な年老いた女性への書き換えは、フェミニズム、エイジズムの視点からロングフェローという作家の保守的女性ヒロイン観の再考を促すであろう。ただ、作品の中で女性=家庭を守るもの、男性=外で働くものという伝統的な価値観を展開するロングフェローが、男性ではなく女性主人公に旅をさせる叙事詩を書き上げたことは興味深い。これは確かに、フランクとマースらが指摘するとおり、ゲーテ(Johann Wolfgang Goethe, 1749-1832)の『ヘルマンとドロテア』(*Hermann und Dorothea*, 1797)のドロテアの旅からの影響なのだろうが、出版当時の19世紀のアメリカにおいて、アメリカ大陸を南北に旅するエヴァンジェリンは非常に活動的な女性なのではないかと思われる。ただ、この点についてさらに言及するには、今後の研究が必要であろう。

筆者が最後に強調したい点は、『エヴァンジェリーヌ二世』は、単にロングフェローの『エヴァンジェリン』におけるアカディア人像=エヴァンジェリンを完全否定したわけではないということである。『エヴァンジェリーヌ二世』というパロディは、パロディのもととなるイポテクスト(hypotext)である『エヴァンジェリン』なしでは存在できない。従って、『エヴァンジェリー

『エヴァンジェリーヌ二世』は、『エヴァンジェリン』と共存関係にあることはいうまでもない。『エヴァンジェリーヌ二世』は、『エヴァンジェリン』が追究した題材(恋人を追う旅、故郷喪失、そしてエスニック・クレンジング)が、現代におけるパロディに耐えうる普遍的なテーマを内在していたことを示す。このように、あるテキストのパロディ化は、そのイポテキストを批判すると同時にその有効性を同時に提示することを可能にするのである。ハッチオンは、『ポストモダニズムの政治学』(1989)においてパロディがパロディ化するテキストに対して賛美・敬意を示す機能をも持つことを論じている(ハッチオン 1991: 148)。

さらに、『エヴァンジェリーヌ二世』が前景化した『エヴァンジェリン』の現代における最たる意義の一つは、その国境を越えた認知度の形成であろう。それは、特にフランスで生まれ育ったエヴァンジェリーヌのブルトン人の恋人が『エヴァンジェリン』を通してアカディア人の存在を、歪んだ形ではあるが知っていたことに示される。このように、『エヴァンジェリーヌ二世』における『エヴァンジェリン』のパロディ化は、『エヴァンジェリン』が世界中で読まれた作品であること、アカディア人の存在を世界に伝えた作品であること、そしてロングフェローが単なるニュー・イングランドの流行詩人以上に広いヴィジョンと多文化主義的関心を持つ人物であったことを今一度我々に思い出させるのである。

『エヴァンジェリン』はアカディア人の存在を世界に知らしめ、それをアカディア内部から批判する『エヴァンジェリーヌ二世』の創作を可能にした。そして『エヴァンジェリーヌ二世』は、先に言及したパロディとそのイポテキストの共存関係ゆえに、近年のアカディア文化への関心の高まりの中で、それが批判した『エヴァンジェリン』およびロングフェローへの世界の注目をさらに高めざるをえないのである。

<註>

- 1) マサチューセッツ州ケンブリッジにて、1837年から1882年までロングフェローが過ごしたクレイギー・ハウス(ロングフェロー・ナショナル・ヒストリック・サイト)は、ジョージ・ワシントン(George Washington)がボストン包囲戦(1775-1776)の際、本部として利用していたことでも知られる。連邦内務省(Department of the Interior)の国立公園局(National Park Service)は、この建物を1972年にアメリカ国定歴史サイト(National Historic Site)に登録した。1997年、セイブ・アメリカズ・トレジャー・アクト(Save America's Treasure Act)により、老朽化したこの建物は修復され、2002年に再オープンした。この建物に関する詳細は、米国内務省国立公園局の公式ウェブサイト(<http://www.nps.gov/long/>)を参照のこと。
- 2) ロングフェローの世紀転換期以降の人気の急落については、ジョイアの他に、澤入要仁の「砂の上の足跡 ロングフェローとアメリカ」(1993)に詳しい。
- 3) 本稿ではライブラリー・オブ・アメリカ版 57-115 頁を『エヴァンジェリン』の底本として利用した。
- 4) 本章の歴史記述は主として木村和男編『カナダ史』、市川慎一著『アカディアの過去と現在』、ナオミ・グリフィス(Naomi Griffiths)著 *The Contexts of Acadian History, 1686-1784* を参考にした。
- 5) ルイジアナは1762年から1800年までの間フランスからスペインに譲渡されていたが、1800年にナポレオンにより再びフランス領化される。しかし、1803年にアメリカ合衆国に譲渡される。
- 6) コノリーはこの話をハリバートンと縁のあるフランス語系カナダ人夫人から聞いたとされる。ロングフェローが詩のベースとなる話を知る過程については、ホーソンとダナ(Manning Hawthorne and Henry Wadsworth Longfellow Dana)による論文“The Origin of Longfellow’s *Evangeline*”を参照のこと。1947年発表のこの論文は後続の研究に大きな影響をあたえた。

- 7) ロングフェローの『エヴァンジェリン』における主眼が、アカディアの物語ではなく、ある女性の生き方の素晴らしさであったことは、グリフィス(1982)、シーリー(Seelye)、マイヤー(Meyer)ほか、ロングフェローの日記に触れた様々な研究者が言及している。
- 8) この段落についてはグリフィス論文(1982)、市川慎一著『アカディアの過去と現在』を参照した。
- 9) 大矢タカヤスは、『エヴァンジェリン』の仏語訳を仏語読みに近い『エヴァンジェリンヌ』として邦訳することを提唱している。彼の2006年、2007年の論文を参照のこと。彼の指摘を参考に、本稿では「エヴァンジェリーヌ」という日本語表記を用いた。
- 10) *The Canadian Encyclopedia*によれば、カレッジの原型は1854年にはじまり、1964年にカレッジとして拡大再整備された。Yves Bolduc et al., “Acadia, Culture of,” *The Canadian Encyclopedia*, accessed 23 May 2007; available from <http://www.thecanadianencyclopedia.com/index.cfm?PgNm=TCE&Params=A1ARTA0011634>.
- 11) 原典には“*And by the evening fire repeat Evangeline’s story*” (p.1397)というくだりがある。
- 12) 実際に過去にはアルカディアと言及されたこともあるというアカディアとアルカディアの関係については、グラディの論文(Grady 1998)が詳しい。
- 13) 前述のフランクとマースの著書は、本稿でとりあげた「牧歌」「旅物語」「ビルドゥングスロマン」を含む『エヴァンジェリン』にみられる様々な形式的実践について詳しく論じている。
- 14) 1966年の「若者の集い」(*Rassemblement des Jeunes*)や、盛んに行われた「詩の夕べ」(*nuits de poésie/poetry nights*)が、その契機になったことをボルデュックやブラウン(*Anne Brown*)が指摘している。特にブラウンはモンクトン大学における学生運動と1960年代後半以降の新しいアカディアの詩のながれの形成の相互影響力について詳しく論じている。
- 15) ボルデュックによれば、このフレーズは現在のニュー・ブランズウィック州副総督(*lieutenant-governor*)のシアソン(*Herménégild Chiasson*)の創造による。
- 16) 「反エヴァンジェリン」という言葉は、1986年のウスミアニ(*Ronate Usumiani*)論文のタイトルにある“*anti- Evanglines*”というフレーズを邦語訳したものである。
- 17) 「文脈横断」という用語は、リンダ・ハッチオン著『パロディの理論』(未来社, 1993)、32頁より。本稿のハッチオン著作引用には、辻麻子訳の『パロディの理論』(未来社, 1993)と川口喬一訳『ポストモダニズムの政治学』(法政大学出版局, 1991)を用いた。
- 18) マイエのアカディア文化における口頭伝承の重視については、現代アカディア文学を詳細に論じたルンテ(*Hans R. Runte*)の著作に詳しい。
- 19) 本稿では、『エヴァンジェリーヌ二世』からの引用を日本語訳する際、ルイ・ド・セस्पデ(*Luis de Céspedes*)による英語訳(1989)を参考にした。本引用部は英訳の40頁を参考にした。
- 20) 市川慎一によれば、しばしばアカディア空間を作品に用いるマイエは、ナショナリストと見られがちであるが、本人はアカディアを特殊化しようとするナショナリストの言説を好まず、あくまでアカディアは世界の一例にすぎないことを主張するという(市川 2007: 77)。
- 21) 拙訳。原典は次の通り。“*Un American, t’as qu’à ouère! Coume si les Amaricains avioint point eu assez de mous baïler des patrons dans les shops, v’la qui s’en venont baïler une patronne au pays, asteur!* (p. 43)” 英訳では36-37頁にこの記載がある。

<引用文献>

一次資料

Longfellow, Henry Wadsworth. “Evangeline: a Tale of Acadie.” *Poems and Other Writings*. Ed. J.

D. McClatchy. New York: The Library of America, 2000. 57-115.

Maillet, Antonine. *Evangeline Deusse*. Montréal: Leméac, 1975.

---. *Evangeline the Second*. Trans. Luis de Cespedes. Toronto: Simon & Pierre, 1987.

二次資料

Bolduc, Yves, et al. “Acadia, Culture of.” *The Canadian Encyclopedia*, accessed 23 May 2007.

<http://thecanadianencyclopedia.com/index.cfm?PgNm=TCE&ParamsA1ARTA_0011634>.

ロングフェロー著『エヴァンジェリン』の再考(荒木)

- Brown, Anne. "Poetry as the Privileged Expression of a People's History." 『カナダ文学研究』12 (2004): 1-30.
- Carter, Ronald, and John McRae. *The Penguin Guide to English Literature: British and Ireland*. London: Penguin, 1996.
- Frank, Armin Paul, and Christel-Maria Maas. *Transnational Longfellow: A Project of American National Poetry*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2005.
- Gioia, Dana. "Longfellow in the Aftermath of Modernism." *The Columbia History of American Poetry*. Ed. Jay Parini. New York: Columbia UP, 1993.
- Grady, Wayne. "Acadians." *Queen's Quarterly* 105.3 (1998): 382.
- Griffiths, N. E. S. *The Contexts of Acadian History, 1686-1784*. Montreal: McGill-Queen's UP, 1992.
- . "Longfellow's *Evangeline*: The Birth and Acceptance of a Legend." *Acadiensis* 11.2 (1982): 28-41.
- Hawthorne, Manning, and Henry Wadsworth Longfellow Dana. "The Origin of Longfellow's *Evangeline*." *The Papers of the Bibliographical Society of America* 41.3 (1947): 165-203.
- Hutcheon, Linda. *The Politics of Postmodernism*. London: Routledge, 1989.
- . 『ポストモダニズム政治学』川口喬一訳、法政大学出版局、1991.
- . *A Theory of Parody*. 1984. Chicago: U of Illinois P, 2000.
- . 『パロディの理論』辻麻子訳、未来社、1993.
- 市川慎一『アカディアンの過去と現在--知られざるフランス語系カナダ人』彩流社、2007.
- 木村和男編『カナダ史』山川出版、1990.
- Meyer, Mathew, C. "Thematic Elements of Henry Wadsworth Longfellow's *Evangeline: A Tale of Acadie*." *Studies in English Language and Literature* 34.3 (1994): 33-67.
- 大矢タカヤス。「ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー『エヴァンジェリンヌ』--もう一つのディアスポラ--」『東京学芸大学紀要人文社会科学系 I』58 (2007): 157-90.
- 。「パンフィル・ルメ訳『エヴァンジェリンヌ』におけるディアスポラの影」『カナダ文学研究』16 (2006): 27-43.
- Runte, Hans R. *Writing Acadia: the Emergence of Acadian Literature 1970-1990*. Amsterdam: Rodopi, 1997.
- 澤入要仁「砂の上の足跡--ロングフェローとアメリカ--」『比較文学研究』64 (1993): 110-31.
- Seelye, John. "Attic Shape: Dusting Off *Evangeline*." *Virginia Quarterly Review* 60.1 (1984): 21-44.
- Usmiani, Ronate. "Recycling an Archetype: the Anti-Evangelines." *Canadian Theatre Review* 46 (1986): 68-73.

主指導教員(佐々木充教授) 副指導教員(高木裕教授・松本彰教授)